

## おばけの季節【新悪夢篇】

陽羅 義光

日常生活のなかに出て来るおばけよりも、夢のなかに出て来るおばけのほうが、怖くはないというのは先入観にすぎません。

夢は非日常におもえるが、じっさいは「日常の延長」であり、うつつの生活と無縁ではないからです。

私がこどものころに一番たくさん見た夢は、いつおばけが出て来ても不思議はない、寂しく暗い道を、いつまでもいつまでも、とぼとぼと歩き続ける夢であります。

何処から来て何処に行くのか、そしてこの道は何処の道なのか、かいつもくわからない。

この夢は私の人生の〈予言〉であり〈象徴〉であり、なぜならば、私は生れてからずっと、寂しく暗い道を、いつまでもいつまでも、とぼとぼと歩き続けているからであります。

おとなになってから一番よく見た夢は、父が死ぬ夢で、それも必ず切腹して死ぬ。儀式にのっとってやるので、余計に生々しく、父の形相やあふれる血潮が更に生々しい。

それを私は目前で見ていて涙を流し、目がさめると枕が涙でひどく濡れているのです。

その濡れ方は半端ではなく、全身の水分がすべて出切ったかんじの量なのです。

フロイトならば「オイディプス・コンプレックス」だということかもしれないが、私はちがう解釈をしていました。

私の前身が江戸時代に生きていて、父が切腹する場面を見たのが深層の記憶になっている、そうでなければ普段泣いたことのない私が、あそこまで泣くわけがない。

ずっとそう考えていたが、その後、父の切腹の介錯（かいしゃく）をわたしがやっている夢も見ました。

となるとやはり「父殺し」の贖罪で泣いたのかもしれないとおもうようにもなったが、さてどうなのでしょう。

こどものころの夢は、出て来ないおばけが、やっぱりすぐ近くにいるという感覚があり、おとなになってからの夢は、「おばけ的なるもの」によって、父が切腹させられたという感覚があるのです。

夏目漱石の、  
『夢十夜』

は、歴然たるおばけが登場するわけではないけれども、この「夢中のおばけ的なるもの」がかんじられます。

その影響下で書かれたとおもわれる、  
内田百間の、  
『冥土』  
『とおぼえ』  
中勘助の、  
『夢の日記から』  
『夢の日記』  
寺田寅彦の、  
『夢』  
『追憶の冬夜』  
なども同様です。

なかでも『とおぼえ』は必読の傑作で、わけもなくおそろしい。  
この「わけもなく」というところが百間ならでは。

【「さあ、もう行かなくちゃ」  
「どこへです」  
「帰るんだ。いくらです」  
「お客さん、本当にどこへ帰るのです」  
「家へ帰るのさ」  
「家と云われるのは、どこです」

「本当を云うと、お客さんは、この前の道を来られましたな。この道 の先の方に家は有りやしません」  
「さあ、もう帰るよ」  
「墓地から来たんでしょうが】

意外なのは、日常を書いた作家、志賀直哉に「夢中のおぼけ的なるもの」を書いた小品が、とても多いことです。

覚えているものだけでも、  
『夢』  
『夢から憶い出す』  
『病中夢』  
『昨夜の夢』  
『妙な夢』  
と、こんなにあるのです。  
そういえば、志賀直哉の傑作、  
『剃刀』  
『范の犯罪』

などは、まさに悪夢ですよ。

これは、私がさきほど云ったとおり、夢が「日常の延長」である証明ともおもわれます。

ユングいわく、

「実際のところ我々は毎日毎日意識の限界を超えて生きている」

どういうわけか、作家というものは、あるいは真正の作家というものは、夢を重要なテーマとして扱います。

長篇小説などで、とりたてて夢をテーマにしなくとも、その重要な箇所に、夢が出て来るといふことが多くあります。

けれどもどうしてそういう夢を見るのか、物語に都合のいい理由は書かれても、客観的で科学的で説得力のある答は提示されません。

いやフロイトやユングがあれこれいっても、真相は霧の中ですから、それこそ小説の題材になりうるわけです。

明確に解釈されてしまう夢は、明確に解釈されてしまう小説と同様に味気のないものですから。

現代作家のなかで島尾敏雄は、「夢の専門家」といってもいいかもしれません。

その単行本の表題を眺めてみると、

『夢の中での日常』

『夢の系列』

『夢のかげを求めて』

『夢と現実』

『夢日記』

『夢屑』

とこれだけあります。

読者は、最初から夢だとわかっているから、『剃刀』ほどには怖くはない。

それでもわけのわからない無気味さに満ち満ちています。

なぜなら夢だとわかっているから、その夢が現実を侵食してくる気がするからです。

大江健三郎や古井由吉の、「私小説」といわれているものを読んでいると、なんだか夢のなかに誘われている気分になってくることがあります。

真正の作家の真似をするつもりはありませんが、それを大いに意識して、『おばけの季節』でも【悪夢篇】を設けてみました。

もっとも、おばけ好きの金ちゃんにとって、おばけや「おばけ的なもの」が出て来る夢は、〈悪夢〉ではなく、〈善夢〉なのかもしれません。

本人にきいてみないとわかりませんが、金ちゃんもよく夢をみて、目覚めると必ず、

「あくむじゃ、あくむじゃ」

とさけぶので、金ちゃんにとってもやはり〈悪夢〉は〈悪夢〉なのでしょうか。

ちなみに【悪夢篇】は長くなりそうなので、途中で読むのをやめてもいいし、途中から読み出してもいいし、途中のみを読んでもけっこうです。

禿光山人 拝

\* \* \*

「か、か、かいじいよ、あ、あ、あくむじゃ、あくむじゃ」

「どうしたんですか、金ちゃんらしくもない、いえ、金ちゃんらしく、おおさわぎして」

「ふん、わしは、めったに、おおさわぎなんか、せんぞい」

「人生は悪夢です」

「あくむも、じんせいかな」

「悪夢こそ人生です」

「なぜじゃ」

「いずれ死ぬべく運命づけられてこの世に生まれてくると、こんな悪夢があるのでしょうか」

「ならば、こどもは、うまんほうか、いいのう」

「けれども、人間は生き物ですから、動物や植物と同じく種の継続という本能があります。この本能には逆らえるものじゃありません。たとえ百億人のうち百人が本能に逆らっても、それこそ大河の一滴です」

「むむむ、かいじいは、そのいってきかのう」

「わたしは自然や運命には逆らいません。たまたま相手に恵まれなかっただけです」

「わしも、めぐまれないことを、いのるかのう」

「金ちゃんは、わたしとちがって、美少年だから、女がほおっておきません。女の魔力には、金ちゃんだっかないません」

「かいじいだって、こどものころは、びしょうねんじゃろが」

「よくご存知ですね。わたしの場合は美少年すぎて、女の子とまちがわれましたから、女の子にはもてませんでした」

「おとなになったら、もてたじゃろう」

「それが、おとなになって難病にかかりましたからねえ。目は窪むし、鼻は欠けるし、口は曲がって、女どころか、だれも寄り付かなくなりました」

「むむむ、しあわせじゃのう。わしは、おんなもにんげんもきらいじゃから、よりつかんほうかええ」

「隣のお姉さんは好きでしょう、あのひと女です。わたしのことも好きでしょう、このわたしも人間です」

「あほか。おねえさんは、おんなじゃのうてめがみじゃ。かいじいはにんげんじゃのうて、おばけじゃ」

「いやはや、金ちゃんには適いません。それではお休みなさい」

「また、そうきたか。こんど、それいうたら、しけい、ってことに、するかのう」

「眠くて死刑になるなら、人間はみんな死刑です」

「にんげんはねむくてもええ。おばけはねむくてはいかん」

「わたしはおばけではなくて、おばけっぽい人間です」

「へりくついうやつも、しけいじゃ」

「金ちゃんに死刑執行されるなら、本望です。それでは永久にお休みなさい」

「まてまて、わしがわるかったぞい。これも、あくむじゃ」

「これも人生ですから、むろん悪夢です」

「まてまて、ねるな、かいじい。わしのはなしをきけ、ごふんだけでもいい。きいてくれたら、わしのたからを、あげるからのう」

「宝には興味はありません。でも、宝ってなんですか」

「みかげいしじゃ」

「御影石ですか」

「ふまんか。やっぱしほうせきがええんか」

「影がつくものに、ろくなものはありませんから」

「そうそう、そのかげじゃ。わしのできるは、そのかげじゃ」

「また誘導訊問にひっかかりましたねえ。影の話には興味があります」

「かいじい、よくぞいうた」

「金ちゃんに、よくぞ、いわされました」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしは、つきよのぼんに、つつじとうげを、とぼとぼあるいとる。どこからきたのか、どこに行くのか、わしにもわからん。ただ、あるいとるだけじゃ。いくらつかれても、あるくのをやめることができません。つきよだから、わしには、かげができてとる。つきは、みぎにでとるから、かげは、ひだりじゃろ。それが、どうしたわけじゃろのう、かげが、みぎなんじゃ。こらあ、かがくてきに、おかしいじゃろ。わしはどこにからくりがひそんでいるか、みまわしたんじゃが、おばけでもでそうな、くら一いみちが、つきにてらされておるだけじゃやった」

「なるほど、【ゆめかげ】ですね。夢に出て来る影は意地悪ですから、科学も物理

学も医学も文学も、みんな裏切ります」

「どうすりゃいいかのう」

「影が逆に出て、困る事があるんですか」

「きみがわるいのう」

「たかが影ですよ」

「そのたかがも、いきとるかんじがすると、きみわるいのう」

「【ゆめかげ】はおばけですから、一応生きています。この世の中で生きられなくとも、金ちゃんの夢の中で生きているんです」

「うひゃあ」

「現実でも影に怯（おび）える人はいっぱいいます。それは影が何かすると思うからなんです、影はおばけでも、影だから何もしません。金ちゃんも、何もしない影のおばけだと、最初から思っ、そのつもりになっていけば、気味悪いこともないでしょう」

「そうか、そうじゃのう」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしは、おおやまを、のぼつとる。あついひで、わしは、ふうふうぜいぜいいうとる。ふつうなら、そんなことはないがのう、なにせ、せなかにおとうとを、せおっているんじゃ。わしは、おとうとはおらんが、ほんにんが、おとうとじゃいうからのう。それが、おとうとのくせに、おとなみたいにおもいんじゃ。ほんまにおとうとかい、そうきくと、どこかわしにそっくりなこえで、うまれなかつたおとうとじゃだと。わしはせなかが、つめたくなるかんじがしてのう、するとざんこくなきもちになってのう、おとうとをふりおとそうとするんじゃが、しぶとくてのう、わしのせなかに、ますますはりついでのう」

「なるほど、【ゆめわらし】ですね。【ざしきわらし】の仲間なんです、【おんぶおばけ】の真似をしたがるんですよ。きっと、金ちゃんのお母さんは、金ちゃんの弟を墮（お）ろしたんですね。貧しい村の貧しい家では、それは普通なんです、墮（お）ろされた子にとっては、普通じゃないんでしてね。お母さんにおんぶすればいいのに、金ちゃんにおんぶしたのは、もし金ちゃんがいなければ、自分が生まれて一人っ子になるという」

「うらみかい」

「恨みというよりも、拗（す）ねているんでしょうか。いや、口惜しいんでしょね」

「そういえば、はぎしりしとったのう」

「口惜しくて、口惜しくて、ところが、わらしだから、どう表現していいかわからない。それで歯ぎしりしたり歯噛みしたり、金ちゃん、肩か背中を噛みつかれませんでしたか」

「くびを、かまれたからのう、きゅうけつきかとおもったぞい」

「夢ですから、どこを噛まれても死にはしませんかね」

「されど、いたかったのう」

「それは災難でしたね」

「さいなんは【ゆめわらし】のほうじゃ。かわいそうじゃのう」

「金ちゃんがそうおもってくれば、きつともう夢に出て来ることはないでしょう」

「それも、さびしいのう」

「淋しいですか」

「きょうだいじゃからのう」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしのからだに、ぐたいてきには、かおととあしに、それぞれでっかいあざができてのう。それがまあみにくいあざでのう。てとあしはなんとかかくせても、かおはかくせんでのう。がっこういきたくないし、だれにもあいたくないし、びょういんいくかねはないしのう。おかんはおいなりさんにいくんだが、おいなりさんはなおしてはくれん。もしかして、おいわさんのはなしをきいたからとおもうてのう。とりかえしのつかんかんじがしてのう。おいわさんのはなしをした、かいじいをうらんでのう。そのうちあざがただれてきてのう、かおがぜんぶくずれてきてのう、こらあおばけにあうよりも、おそろしいことじゃとおもうてのう」

「なるほど、【ゆめあざ】ですね。この痣はどんどん悪化しますから、業病（ごうびょう）という印象ですが、病気ではなくておばけのしわざなんです。【ゆめあざ】は人間に寄生するおばけですから、文字通り寄生しないと生きられない。しかし痣だらけになってしまっただけでは、寄生したことにはならないですから、爛（ただ）れたり崩れたりも、ほどほどで止まるはずですよ」

「ならば、あんまりこわくはないのう」

「いまさら何ですが、おばけはどれも本来怖いものではないんです。人間が怖がるから怖いのであって」

「そうかのう、おばけは、こわいから、おもしろいんじゃないのう」

「怪談というものがあるでしょ。あれは作者が読者を怖がらせるために書いたものなので、いわば嘘のおばけが登場するのです」

「ならば、うそでないおばけとやらは」

「怖くないおばけですよ」

「こわくないおばけなんぞ、つまらん」

「つまらなくても、怖くないから仕方ない。金ちゃん、おもいだしてください。いままで金ちゃんが出逢った沢山のおばけ、怖いものなんていましたか」

「そらあ、わしがおばけずきじゃから、こわくないんであって、ほんとうはこわいんじゃ」

「だれがそんなことを決めたんですか。もしおばけに人間と同じ権利があったなら、訴訟（そしょう）を起こすでしょう」

「そそうたあなんじゃ」

「粗相というのは、金ちゃんがよくやることです。訴訟というのは、金ちゃんがやったことのないことです」

「わしはそそうなんかせん」

「なんだ、知っているんじゃありませんか」

「かいじいよ、そそうしたな」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしがいったことのないうみべにいくと、おんなのこがぶるぶるふるえて、ないとる。いじんさんにつれられていっちゃうのかと。わしはおんなぎらいじゃが、おんなのこはおんなじゃないからのう。かわいそうになって、なんでないとるのと。そしたら、おんなのこは、もうすぐ、うみがめがやってくる、そしたらうみがめにたべられてしまうんだと。そらあいかん、わしがそのうみがめをたいじしちやる、ってわけで、うみがめをまっとったが、いっこうにこやせん。おんなのこに、いつくるんじゃときくと、もうきているという。いったいどこにおるんじゃときくと、ここにいるという。そいで、おんなのこはうみがめにへんしんして、わしをたべるんじゃ」

「なるほど、【ゆめがめ】ですね。海亀の化身で、海の底の底の竜宮城（りゅうぐうじょう）からやってきたおばけです」

「うらしまたろうの、あれかのう」

「浦島太郎のあれですよ。竜宮城で乙姫様が、お土産の玉手箱をくれるでしょう。それで太郎さんはお爺さんになってしまう。乙姫様は意地悪なおばけの女王様なんですよ。その手下が【ゆめがめ】でして。浦島太郎が乗った海亀も【ゆめがめ】で、じつは浦島太郎を食べようとしたんですが、お爺さんはまずいので食べなかったのです」

「わしはうまかったのかのう」



「金ちゃんなら、わたしだって食べたいですよ」  
「うれしいことをいってくれるのう」  
「ですから【ゆめがめ】の夢を見ない手があります」  
「おじいさんになることかのう」  
「当たりです。しかしそうもいかないから、わたしの似顔絵を描いたお面をかぶって寝ればいいんですよ」  
「にがおえはとくいじゃ。かいじいなら、めえつぶってもかける」  
「嬉しいことをいってくれるのう」  
「うそもほうべんじゃ」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」  
「お聞きしましょう」  
「やぶのなかでうんこしとるわしのまえに、にんげんかもしれない、ぶたかもしれない、ばくかもしれない、よくわからんいきものがあらわれて、これからとくいのげいを、ばっちりおみせしましょう、とかなんとかかかってにいて、いったとたん、べろをべろんとだしたかとおもいきや、そのうちないぞうもべろんとだして、あれもこれもべろんべろんとだしまくって、からだのなかとそとが、ひっくりかえって、なまなましくおぞましいべろんべろんが、わしにおおいかぶさってくるんじゃ」  
「なるほど、【ゆめがえり】ですね。【こむらがえり】の仲間、一種の【けいれんおばけ】というものです」  
「わしは、いろのついたゆめをよくみるんじやが、その【ゆめがえり】のいろは、きもちわるいぞい」  
「怖いもの見たさ、ということがあるでしょう。金ちゃんにとって、おそらく人間の内臓が、その怖いもの見たさの対象なんでしょうね。いえ、人間の内臓だけではありません。金ちゃんは蛙の解剖（かいぼう）が好きでしょう」  
「わしは、ざんこくなことはきらいじゃ」  
「嫌い嫌いも好きのうち」  
「きらいきらいも、きらいのうちじゃ」  
「怖いもの見たさの人間がいるのと同じくらいの数で、怖いもの見せたやの人間がいるのです。まあこの場合は怖いもの見せたやのおばけということですが。【ゆめがえり】はそういうおばけの大将です」  
「なんとかならんのかのう」  
「しかし人間の内臓の気持悪さというのは、うつつですからね。そのうつつが夢になるんですから、これは防ぎようがありません」  
「かいじいでもむりかのう」

「そういわれると、なんとかしたくなるのが、わたしの悪い癖でして、金ちゃん、腓返り（こむらがえり）したときはどうしますか」

「あしがつったり、けいれんしたときには、みずをのめと、せんにおかんがいったのう」

「そのとおりです。【ゆめがえり】は水に弱いですから、寝る前に水をいっぱい飲むとよろしいでしょう」

「あほか。そらあ、ねしょうべんして、あくむみるどこじゃないわい」

「ばれましたか。じつはほんとの話、悪夢を見ないようにするには、眠らないことしかないんですよ」

「よっしゃ。わたしはこれから、ねむらんぞい」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わたしはどうしても、ねむるわけにはいかんとおもうているとのう、ていうか、ねむれんでのう。てんじょうのいたの、ふしあなとねんりんのもくめを、ずっとみていたんじゃ、あのぐるぐるまきのやつをな。したら、いつのまにかねむっていたんじゃなあ、くらいうちゅうの、ぐるぐるまきのまんなかを、ぐるぐるまわってすいこまれていくんじゃ。わたしはさけびごえをあげるんじゃが、こえがでないんじゃ。まるでおとのないせかいにいるようでのう。ゆくさきはわからんが、おそろしいところだとはわかる、とてつもないおぼけが、おくのおくのそのまたおくにいるんじやろのう」

「なるほど、【ゆめならく】ですね。奈落の底に吸い込まれるんですよ。【ゆめならく】は、おもに睡眠不足の人間を狙うんです」

「なにかわるさをするんかのう」

「とてつもないおぼけが、奥の奥のそのまた奥にいるわけではなく、そのぐるぐるがおぼけなんですよ」

「ならば、いつまでたっても、ぐるぐるかい」

「宇宙の底なし沼です。まあとんでもない悪夢を見たもんですねえ。これからは天井の板の節穴とか年輪とか、見ながら寝てはいけませんよ」

「ならば、なにをみるんじゃ」

「部屋の障子（しょうじ）とか襖（ふすま）がよろしいでしょう」

「すると、【ゆめしょうじ】とか【ゆめふすま】が、ゆめにでてくるんじやないかのう」

「おっしゃるとおりです。けれども【ゆめしょうじ】も【ゆめふすま】も【ゆめならく】にくらべれば可愛いものです」

「そのかわいいものを、みてみたいのう」  
「きっと見られますよ」  
「たのしみじゃのう」

\* \*

「こんなゆめをみたぞい」  
「お聞きしましょう」  
「わしがうちで、めずらしくしゅくだいをやっておるとな、しんせきでもないしりあいでもない、へんなおじさんがやってきて、へやのまんなかになすわらんじゃ。なにかようかのうときくと、なんもようはないという。おちゃでものむかのうときくと、おちゃけがいいという。あいにくうちにやあ、おやじがおらんから、さけはないぞい、というと、だばみずでええ、みずのんでよっぱらうから、それでええというんじゃ。きつねにつままれたきぶんじゃったが、わしがみずをだすと、それをうまそうに、ちびりちびりのんでのう、そのうち、きぶんようになって、うたをうたいだすんじゃ。そのうたのへたなことへたなこと、みんなようなんじゃろが、わたしにはおきょうにきこえたがのう。とにかくいつまでたってもかえらん、かえらんで、なにかはなしかけたりしとる。なにをいったか、おぼえとらんが、きつとつまらんことじゃ。けつきよく、へんなおじさん、わしがめがさめるまで、いすわつとった」  
「なるほど、【ゆめなごり】ですね。名残惜しくて帰らないおばけですよ。人がいいんです。いや人はおかしいですね、おばけがいいんです」  
「いいかもしれんが、めいわくじゃのう」  
「それを迷惑とおもうか、有り難いとおもうか」  
「ありがたい、じゃと」  
「はい、わたしみたいにないつも一人ぼっちの人間は、金ちゃんが来てくれると有り難い。いつまでも居座ってもらいたいくらいです」  
「うそこけ。わしがいすわると、いねむりするくせに」  
「あれは有り難くて、安心して眠たくなるんですよ。とにかくまた【ゆめなごり】が出て来たら、優しくしてあげてくださいね」  
「そうするぞい」

\* \*

「こんなゆめをみたぞい」  
「お聞きしましょう」

「わしはみちにまようて、あげくどこのどんなみせだかわからんとこにまよいこんで、かえりたいんじゃがひきとめられておる。とおくでなにかが、ほえとってのう、とおぼえというやつじゃが、なにがほえとるのか、さっぱりわからん。いぬでもなし、おおかみでもなし、いのししでもなし、くまでもなし。あれはなんじゃと、みせのあるじにきくと、やまのかみさまじゃという。やまのかみさまが、なんでほえるんじゃときくと、やまのかみさまがはらすかしとるという。やまのかみさまがなんではらすかすんじゃときくと、このごろけいきわるいで、やまのかみさまにおそなえをするものが、このむらにはだれもおらんという。わしがおそなえしちやるといふと、あるじがけっそうかえて、やめとけ一、きんちゃんがおそなえになっちまうという。わしもおそなえになるのはごめんじゃからのう」

「なるほど、【ゆめぼえ】ですね。それは山の神様の遠吠えではなく、【ゆめぼえ】の遠吠えなのです。吠えて吠えて吠えまくって、人間をこわがらせるだけのおぼけで、遠吠えするほかは何もしません」

「だば、こわくはないのう」

「でも人間は、遠吠えするだけだとはおもっていませんから、何かされるんじゃないかとおもって怖がるんですね」

「みせのあるじが、だんこやまのかみさまだというし、わしがおそなえになるっていうんで、よけいにおそろしかったぞい」

「そうなんです。恐ろしいのは遠吠えよりも、店のあるじの言葉なんです。ですから【ゆめぼえ】はある意味、冤罪（えんざい）なんですね」

「えんざいとはなんじゃ」

「無実なのに有罪になることです」

「かいじいとぎゃくじゃな」

「げっ、わたしは有実なのに無罪になるってわけですか」

「そういうこっちゃ」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしがそのあばらやにいくと、たぶんさっかじゃろ、つくえにむかって、なにかかいとる。ねじりはちまきして、うんうんうなって、しにものぐるいでかいとる。まずまずうさんくさいさっかじゃわ。なにをかいとるんじゃときくと、かいだんをかいとるという。どんなかいだんをかいとるのかときくと、それをいっちゃあおしまいよという。どうしておしまいなんじゃときくと、それをいっちゃうと、かくだ

けじゃすまなくなるという。どうすまなくなるんじゃときくと、いまかいているおぼけがでてきて、うさんくさくてかなわんという。どこにでるんじゃときくと、ほらもうここにでていう。わしはふりかえって見たが、なにもみえん。ほらいるだろうとさっかはおこっていう、おりやせんとわしはいう。それをなんどもくりかえしとるんじゃ、めがさめるまでくりかえしとる」

「なるほど、【ゆめさっか】ですね。ほらいるだろうというのは、その作家自身がおぼけだから、ほらここにおるという意味です」

「あらま、あのさっかがおぼけだったんか」

「正確には、怪談話を書いていて、一心不乱に書いていて、自分がおぼけになってしまった作家です」

「あらま、いっしんふらんにかくと、そのかいたものになっちまうのかい」

「金ちゃんだって、例えばわたしの似顔絵を一心不乱に描いていると、いつにまにかわたしになってやしませんか」

「なにぬかすか。どうしてわしがかいじいになるんじゃ」

「そうですか、それはきっと一心不乱ではなく、遊び半分に描いているからなんです」

「しつれいじゃのう」

「違いますか」

「ちがわん」

「なら、失礼ではないですよ」

「あたっているから、しつれいなんじゃ」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしがおおやまのふもとにいくと、そこにすげえでっかいいわがあるんじゃ。そのいわをわしはおして、ころがして、おおやまのてっぺんまではこぶのじゃ。なにやらわからんが、そういうことになつとる。それでもそのいわはおもくてのう、なかなかうごかん。うごかんものをうごかすのじゃから、しにものぐるいじゃ。だれもおうえんにきてはくれんし、はらはすくしのどはかわくし、こらあよっぼど、わしはわるいことしたにちがいないとおもうとる。なにをしたんじゃろ、いわにきいてもこたえてくれんし、それでもやすむわけにもいかんし、いんややすんでもええんじゃろが、やすむというかんかくがわからんのじゃ。やすむというのはどうすることじゃろ、なんてかんがえながら、あせとなみだとしょうべんでぐちゃぐちゃになつとる。しょうべんならまだええが、うんこがしたくなつたらどうするんじゃと、きがきでないんじゃが、わしはしょうこりもなく、いわをせっせとおしとる。めが

さめたときは、つかれてへろへろじゃ」

「なるほど、【ゆめがんせき】ですね。あれは休むと岩石に押しつぶされるんです。だから休むわけにはいかないんです」

「おしつぶされても、ゆめじゃから、もんだいないのう」

「とんでもない、夢で押しつぶされたら死にます」

「うそこけ。わしはゆめで、なんどもころされとるが、こうしていきとる」

「金ちゃんがいま生きているという、証拠はありますか」

「かいじいとかうしてはなしとるのが、しょうこじゃ」

「だって、わたしは死の世界の住人かもしれませんよ。そしたら金ちゃんはもう死んでいるのです」

「どっちでもええ」

「そんな捨て鉢な」

「どっちでもええんじゃ」

「そんな頭の硬い」

「【ゆめがんせき】のほうか、あたまがかたい」

「そう、融通（ゆうずう）がきかないおぼけなんですよ」

「わしといいしょうぶじゃ」

「それはそうでしょう。なぜなら【ゆめがんせき】は金ちゃんと同類のおぼけですから」

「そうか、わかったぞい」

「何が解ったんですか」

「わしはわしの、いしあたまをおしとったんじゃな。もしおおやままで【ゆめがんせき】をはこんだら、どうなるんじゃ」

「また禁（ふもと）から、押すんですよ」

「かったるいのう」

「人生はかったるいものです」

「めんどろじゃのう」

「人生は」

「はい、そこまで」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしがこうていでいねむりしとると、いろんなむしがあとからあとから、わしのからだにまとわりついてくるんじゃ。むかでげじげじけむしごきぶるかぶとむしくわがたやもりいもりだんごむしくそむしすずむしこおろぎかまきり。ほかになまえ

をしらないむしもごまんとうのう。そうじゃごまんじゃ。かぞえたわけではないがのう。そいつらがわしのからだというか、まずかおをすこしずつくっとるんじゃ。いたくはないがくすぐったくてのう。それにはなをつまんでも、たまらんにおいがしてのう。おいはらってもおいはらってもあとからあとから、ぞりぞりおとたててまわりついてくる。まずはなとみみがくわれてなくなるとる。それからめだまをくいはじめる」

「なるほど、【ゆめむし】ですね。もともとは、回虫のおばけなんですけど、最近のこどもは虫くだしを飲んでますから、おなかの中にいられなくなって、いろんな虫に姿をかえて襲ってくるんですね」

「けしからんのう、おぞましいのう」

「でも金ちゃん、鼻も耳も目もまだありますねえ」

「あたりまえじゃ。ゆめでくわれたんじゃからのう」

「夢でも目覚めると、鼻とか齧（かじ）られていることがありますよ」

「そらあ、ねずみのしわざじゃろ」

「いえいえ、鼠の齧り方とはちがうんです。【ゆめむし】の仕業です」

「なんでわしはぶじなんじゃろ」

「そんなことしたら、金ちゃんの復讐（ふくしゅう）がおそろしい」

「わしはふくしゅうなんかせん。はなは、すこしかじられたほうがかつこいいんじや」

「へえ、そういうもんですか、初耳です」

「わしもはつしゃべりじゃ」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしはともだちと、ちゃんばらごっこしとる。ともだちはかんちゃんのかしんちゃんのかとんちゃんのかわからんが、どっちがみやもとむさしで、どっちがささきこじろうかで、もめとる。どっちもにとうりゅうやりたいからのう、ものほしぎおはながすぎて、ふりまわせんからのう、それにがんりゅうじまでかちたいからのう、むさしになりたいんじゃ。するてえといつのまにか、ほんもののみやもとむさしがあらわれてのう、わしもともだちも、むさしにめちやくちゃにきられてしまうんじゃ。たすけてくれゆるしてくれとさけんでも、おにのぎょうそうのむさしはきいてくれん、いつまでもきりきざんでおるんじゃ」

「なるほど、【ゆめむさし】ですね。剣豪のおばけの代表格ですが、切り刻むのが好きで、夢のなかのおばけの調理人とよばれています」

「むむ、【ゆめむさし】かい。【ゆめむし】とまちがえるのう」

「おおよそ、劍豪のおぼけは二刀流を使いたがりますね。金ちゃんたちが宮本武蔵になりたがるのと一緒ですよ」

「おとなげないのう」

「劍豪といったって見方によればちゃんばらごっこですからねえ。【ゆめむさし】はおとなげないおぼけの代表格です」

「だいひょうかくたあ、おやぶんのことじゃろ。おとなげなくてもおやぶんになれるんかあ」

「ほっほ、親分というものはどんな業界の親分でも、みんなおとなげないんですよ」

「しらなかったのう」

「ですから、もし金ちゃんが親分に会ったら、おとなげないやつだとおもって対応するにかぎります」

「こまったのう」

「何が困るんですか」

「わしはともだちから、おやぶんいわれとる」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしがよなかに、にわのべんじょでくそをたれとると、なにかみょうなおとがきこえるんじゃ。またおぼけがおぼけおどりをしとるんかとおもうたが、にわではのうてすぐちかくでみょうなおとがするんじゃ。それはなにかをひきずるようなおとで、なにかというたらまあしたいをひきずるようないやーなおとで、きみがわるうてのう。きよろきよろしたがわからんで、くそたれのままべんじょのそとにでて、つきあかりをたよりにみまわしてみたんじゃ。するてえとえあしのしりのあなから、くそではのうて、なにやらみみずのぼけものみてえなもんが、ずるずるぬめぬめとでとるんじゃ。こらあわしのちょうかとおもうて、こういうのをだっちょういうんじゃろかとおもうて、なんとかひっこめるどりよくをするんじゃがのう。みみずのぼけものはどんだんがなくなつて、ずるずるぬめぬめいくらでものびていって、にわをうめつくすんじゃ」

「なるほど、【ゆめみみず】ですね。脱腸ではなくて痔のおぼけです」

「じたあ、いぼじとかきれじとかの、あれかのう」

「はい、疣痔でも切痔でもなく、蚯蚓痔です。もしかして金ちゃん、蚯蚓に小便をふりかけませんでしたか」

「あほぬかせ。しょうべんしたら、みみずがそこにおったんじゃ」

「ふつう蚯蚓に小便かけたら、ちんちんがひどく腫（は）れるといわれますが、金ちゃんはちんちんに免疫（めんえき）があるので、肛門にきたんですね」



「めんえきたあ、どういういみじゃ」  
「つまりその、ちんちんの病気に何度もかかったでしょう」  
「いちどだけじゃ」  
「そうでしたか。印象が強すぎて」  
「やっぱし、みみずをあらうひつようがあるかのう」  
「なにしろ夢ですからね」  
「なんとかせいや。あんなぶきみなあくむは、にどとみとうはない」  
「それなら夢のなかで、蚯蚓を洗ったらいかがでしょう」  
「それがええ。だども、そんなゆめをつごうよくみるもんかのう」  
「それもそうですね。それならこんど【ゆめみみず】があらわれたときに、洗ってあげたらどうでしょうか」  
「さすがは、かいじいじゃ。だども、あんななが一いやつをあらうのはたいへんじやのう」  
「切り刻んでから洗ってあげたら」  
「それでいいのだ」  
「切り刻み方にもいろいろありまして」  
「うんちとうんちくは、もうええ」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」  
「お聞きしましょう」  
「わしのまえをおがわがながれとる。いつものおがわでのうて、いまはながれがはやいしみずかさもましとる。わしはどうやらみなげをするつもりらしい。ひとりでみなげをするのはさびしいしつまらん。となりのおねえさんをさそおうかとおもうが、おねえさんはひとりでみなげするのがにおうとる。しかたないからひとりでみなげすることにするが、もんだいは、しんだらわしのことを、はなしてくれるもんがおるかじゃ。かいじいのことであたまにうかんだが、なにせかいじいはとしよりじゃからのう。それでまよっていると、うしろからどんとおすやつがおる。おされてとびこんだが、つめたくてくるしくてたまらん。しまったとおもうたが、もうとりかえしがつかん、こんちくしょうとおもうたが、もうとりかえしがつかん。しぬーしぬー、たすけてくれー」  
「なるほど、【ゆめじさつ】ですね。自殺を迷っている人間に、踏ん切りをつけさすおぼけです」  
「けしからのう、よけいなことするのう。おもいとどまらせるおぼけはおらんのか」  
「悪夢ですから、そんな都合のいいおぼけは出て来ません」

「かいじいは、じさつを、どうおもうとるんじゃ」

「自殺は他殺とかわりません。自分という人間を殺すんですから殺人です。本来なら監獄に行かなければいけません、生きていないからしかたがない」

「げっ、じぶんのいのちは、じぶんのもんじゃないのかい」

「断固ちがいます。この世界に、自分のもんなんて何もありません」

「ううむ、かいじいはやっぱし、へんじんじゃのう」

「そう考えない人こそ変人です。金ちゃんのご先祖には、自殺した人がいっぱいいるんですね。どうやら金ちゃんにもその志向があります。わたしのいったことをよく覚えておいてください」

「それよりも、しんだら、わしのおもいはつたわるんかのう」

「そんなもの伝わらなくてもいいんじゃないですか。どうでもいいけれど、伝わるんですよね。ある文化人が、だれであっても死者の声を代弁（だいべん）することはできない、なんていっていますが、それは単細胞的な意見ですね。死者の声は生者の声よりも代弁できます。それを代弁するのが、芸術家というものです」

「わしもげいじゅつかじゃのう」

「何故ですか」

「くそったれだからじゃ」

「糞っ垂れですか」

「いやでもまいにち、だいべんしとる」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしはうちのやねにのぼつとる。なぜかというに、おおあめでおおかわがあふれたからじゃ。じつはわしはおおあめがだいすきなんじゃが、おかんがやねにのぼれとうるさいからのぼつとる。わしがのんきにできなかったのは、となりのおねえさんがしんばいだったからじゃ。それでとなりをみると、あらま、いえがながされとる。こりゃあかん、わしはおよぎがとくいじゃから、あふれるみずにとびこんだんだが、ながれがはげしくてのう、あせればあせるほど、おねえさんのいえからとおくってしまう。するてえと、みずのなかからでっかいたこがあらわれてのう、わしはそのおおだこのあしにのって、おねえさんをおいかけるんじゃが、どうやらたこはおねえさんをくいたいので、おいかけているらしいんじゃ。こりゃあかんとわしは、たこのあしをくいはじめるが、なにせでっかいたこじゃから、くってもくってもびくともせん。こりゃあかんとわしは、えいやあとくじらにへんしんして、おおだこをひとのみにしようとしたもんじゃが、ひとのみされたのはくじらのほうじゃった」

「なるほど、【ゆめだこ】ですね。これはもともと鮪焼きだったのですが、お客さんに不味い不味いといわれてばかりいたので、あたまにきて大鮪に変身したおぼけです」

「たしかにまずかったのう」

「おそらく海から大川に迷いこんで、大川の堤が決壊したので、金ちゃんのところへ行ったのでしょう」

「なぜにわしのところへ」

「屋根とか高い所にのぼるのは狂人の癖です。狂人とおぼけは似たもの同志。【ゆめだこ】は金ちゃんを仲間だとおもったのでしょう」

「わしは、きょうじんかい」

「強靱でもあります」

「お世辞はええ。【ゆめだこ】はおねえさんをくうのかのう」

「たぶん【ゆめだこ】はお姉さんに食べられてしまうでしょう。お姉さんは生鮪が大好物ですからね」

「それはしらなかったのう」

「人はみかけによらないものです。金ちゃんも鮪とまちがえられて、食べられないように気をつけてください」

「おねえさんなら、たべられてみたいのう」

「そういうとおもっていましたよ。金ちゃんの変態ですものねえ」

「へんたいじゃねえ、わしはたいへんじゃ」

「食べられると大変なことになりますよ」

「わかっとる。おねえさんのうんこになってみたいのう」

「やっぱり変態ですね」

「もんくあつか」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしはゆめをみているんじやが、どうやらゆめのなかでゆめをみているらしいんじや。ひとくちふたくちじやいえんくらいのおそろしいばけものに、おそわれてころされて、めがさめて、ああたすかったと。そしたらそこへまたおそろしいばけものがでてきて、おそわれてころされるんじやが、まためがさめて、ああたすかったと。そしたらそこへまたおそろしいばけものが、てなわけですらたってもおわりやせん」

「なるほど、【ゆめのまたゆめ】ですね。出て来たばけものはいわゆるばけものであって、正真正銘（しょうしんしょうめい）のおぼけなのではなく、夢のなかで夢

を何度も見させる、そういう辣蕪（らっきょう）地獄におとす【ゆめのまたゆめ】がおばけなのです」

「ややこしいのう」

「【ゆめのまたゆめ】は、実にややこしいおばけです」

「いんや、かいじいのせつめいが、ややこしいんじゃ」

「そら失礼、ややこしやあ、ややこしやあ」

「ふざけるんでねえ」

「まあ滅多（めった）に出て来ないおばけなので、たまにはややこしくとも勘弁してください」

「そうかのう。わしは【ゆめのまたゆめ】を、よくみるぞい」

「そうおもっているのも、夢かもしれませぬね」

「ますます、ややこしいのう」

「そら失礼、ややこしやあ、ややこしやあ」

「かいじいよ、わざとややこしくしとりやせんか」

「そういうおばけですから仕方ありません」

「おばけのせいにするでない」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしはがむしゃらに、はしつとる、むらのひろばを、ぐるぐるはしつとる。もしかしてとおもうたが、やっぱりわしはけいばうまになつとるんじゃ。いちばんにんきじゃから、よけいにがんばってはしらにゃならん。せなかではきしゅが、むちをうならせる。わしはもうひっしではしるんじゃが、さいごのさいごでぬかれて、にちゃくになってしもうた。ばけんをかったおきやくさんが、わめいてないとのがみえる。わめいてなきたいのはわしのほうじゃ。ぎゃー、ひひん、はなさじゃ、はなさのひげきじゃ、ぎゃー、ひひん」

「なるほど、【ゆめけいば】ですね。馬券がはずれて一文無しになった夢は多いらしいんですが、競馬馬になるってのは珍しい」

「まいったか」

「まいません。【ゆめけいば】は、けいばうまに変身させて、しかも負けさせるおばけです」

「ううむ、ゆめがないのう」

「賭け事なんてそんなものです」

「かいじいは、けいばやらんのか」

「元金がありませんから」

「たしかにのう。やりたくともできんわけか」  
「やりたいなんて言うておりません」  
「じぶんをだまさんほうがええ」  
「しかし人生は賭けですから、元金があればやります」  
「だんだんしょうじきになってきたのう」  
「金ちゃん、元金かしてちょうだい」  
「こどもにいうことか」  
「返さないけど、貸してちょうだい」  
「さいあく」

\*            \*

「こんなゆめをみたぞい」  
「お聞きしましょう」  
「わしがのぞんでもおらんのに、わしはにっぽんではない、しらんくにおる。このくにのにんげんは、みんなあおくひかっとなる。なんでそんなにひかっとなるんじやときくと、わからんところたえる。それでもわしにはわかっとなる。このくにのにんげんは、あさひるばん、にんげんをくうとする。にんげんがにんげんをくうてばかりおると、にんげんがいなくなるぞという、そのためにじゃんじゃんこどもつくるんだところたえる。みんなやさしいので、わしはにっぽんにもどるきはないが、わしはいつくわれるのか、それだけがきがかりでのう。おもいきってそれをきいてみると、きんちゃんにはにんげんじゃないからくわんとこたえる」  
「なるほど、【ゆめくに】ですね。日本とちがう国に誘うおぼけです。どういう国に誘うかは、夢見る人しだいでしてね」  
「つまりなにか、わしがのぞんでるというんか」  
「そういう意味ではありません。夢見る人の好奇心で、どの国か決まるというわけです」  
「わしはひとくい、こうきしんなぞない」  
「そう意固地（いこじ）に否定するのは、そういう事なのですよ」  
「なにがそういうことじゃい」  
「あのね金ちゃん、絶対違う断固違うといい続けた人が、絶対断固そうだった例は五万とあるのですよ」  
「わしもごまんにはいるのかのう」  
「入りますね」  
「できれば、おまんにはいりたいものじゃ」

\* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしがむらのひろばにいくと、そこにいっすんぼうしがおってのう。はりみたいなかたなで、わしのことをちくちくするんじゃ。いいかげんにせんと、ふみつぶすぞというと、いじめだいじめだよわいものいじめだ、とさわぐ。このやろーうるせえとさけぶと、いつのまにかつくつくぼうしになって、つくつくぼうしつくつくぼうしと、うるそうてかなわん。うるそうてねむられんというと、ねむるひまがあったらおれのまねをしると、きょうせいするんじゃ。まねをしないとなにをされるかわからんとおもうたので、わしもつくつくぼうしつくつくぼうしとわめくんじゃが、どうしたわけかとまらん。ひゃっくりよりもとまらん。そんでけっきょく、めざめるまでわめいとった。のどがかれたわい」

「なるほど、【ゆめぼうし】ですね。強制するから厭なもんですが、金ちゃんも被害妄想（ひがいもうそう）がひどくなっているのかもしれない」

「もうそうたあ、うまそうじゃのう」

「孟宗竹（もうそうちく）ではありませんよ」

「しっとるわい。じょうだんじゃ」

「【ゆめぼうし】には冗談は通じませんよ」

「かいじいは、なんでもかんでも、ゆめをつけりゃいいとおもってやせんか」

「ばれましたか。でもそういうおぼけの名前なんだから、仕方ありません」

「なづけおやは、かいじいじゃないんか」

「ばれましたか。でもだれかが名付けないと、名無しになってしまいます。名無しではおぼけも浮かばれません」

「しずんどりゃあええ」

「そんな殺生（せつしょう）な。金ちゃんだつて、金ちゃんという名前がなければ、あのこちゃんとかそのこちゃんとかこのこちゃんになってしまいますよ」

「それもわるくはないのう」

\* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしはなぜだかとおつぜん、うみがみたくなつてのう。それでうひょーと、そらをとんでうみにいったんじゃが、なぜだかきれいなにんぎょがあらわれてのう。きんちゃんきんちゃん、こちらにおいでと、うみのなかに、かいていにさそうんじゃ。

わしはあほたれじゃないから、かいていにいけば、おぼれるのはわかつとる。にんぎょはわからんが、わしにはえらなんぞないからのう。それでもにんぎょは、こっちこっちと、なまめかしくさそうんじゃ。そのおきそいには、さからえんとおもわれてのう。かくごをきめたら、めがさめたっていうわけじゃ」

「なるほど、【ゆめにんぎょ】ですね。隣のお姉さんに似ていたでしょう」

「そういわれれば、そうじゃのう」

「【ゆめにんぎょ】は好きな人に似せるのが得意です。もし男が好きなら男にだつてなります」

「おとこのにんぎょたあ、うすきみわるいのう」

「金ちゃん、どうして人魚は下半身が魚なのか知っていますか」

「しらいでか。それはにんぎょだからじゃ」

「答になっていませんね。人魚は人間といとなみができないように、そうになっているのです」

「いとなみたあ、なんじゃ」

「つまりその、男と女が愛しあうことです」

「あいしあうと、いとなみをするんか」

「まあその、普通はそうです」

「ならば、わしとかいじいは、いとなみせにゃならんのう」

「げっ、わたしと金ちゃんは男と女ではありません」

「ならば、わしとおねえさんは、いとなみせにゃならんのう」

「大人になったら、自然とそうなるでしょう」

「しぜんたあ、めんどうなもんじゃのう」

\* \* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「わしがのどがかわいたという、おかんがのみものをもってきた。あかいろをしたのみもので、ちっともうまくはない。なんじゃこれときくと、それはおとんのちじゃとこたえる。わしはきゅうけつきではないぞいという、きんちゃんごろしたおとんのちじゃとこたえる。わしはおとんをころしたおぼえはないぞいという、きんちゃんはれいこくだからおぼえがないんじゃという。おかんはころしてはおらんのかときくと、きんちゃんといっしょにころしたとこたえる。やっばしそうか、でなければおとんのちなんかもっているわけがない。まだあるのかときくと、いっとだるにいっばいじゃとこたえる。いくらおとんがおおおとこでも、いっとだるはなかりとうい、ごせんぞさまのちもいっしょじゃという。ごせんぞさまもころしたんかときくと、ころしていないごせんぞさまはおらんとこたえる。このま

ずいちをのむとええことあるんかときくと、ながいきするところたえる。ころしたちのんでながいきしてもくだらんという、それならきんちゃんもころしてちぬいてあげるとい

「なるほど、【ゆめおかん】ですね。母親の姿を借りて出て来て、残酷なことをいうお婆けです」

「いだけかい」

「はい、脅かして喜んでいるお婆けです」

「おどかしだけかい」

「脅かしだけです」

「たちがわるいのう」

「そういうお婆けよりも、そういう人間のほうが多いんですがね」

「わしはどうぞ、それだけじゃないきがするのう」

「それはどういう意味ですか」

「おどかさだけでなく、しんじつをばらしているきがするぞい」

「もしそうなら、恐ろしい話ですねえ」

「ざんこくというのは、そういうことじゃろ」

\* \*

「こんなゆめをみたぞい」

「お聞きしましょう」

「きりがなからもうやめるぞい」

「ああ、助かった。ではお休みなさい」

「いいゆめみろよ、かいじい」

「金ちゃんもね」

「わしはもうねむらんから、しんばいいらん」

\* \*

いつからか私は眠らなくなりました。

そんなことはない、しょっちゅう居眠りしているのではないか、と周りの人たちはいうけれども、すくなくとも自分からすすんで眠ることはしていない。

本を読みながら、テレビを見ながら、いつのまにか眠っていたり、飛行機や電車やタクシーはもちろん、映画館や病院やパチンコ屋は居眠りするのにいい場所であります。



居眠りは自然にそうなるのでしかたないが、意識しては睡眠をしないようになり  
ました。

ですから私の一日の平均睡眠時間は、まちがいなくナポレオンより少ない。  
むろんそんなことは自慢ではなく、事実を述べたにすぎません。

私は睡眠薬を服用する人の気がしれません。

眠れないのなら、そんな幸せなことはありません。

眠れなければ、眠らないで、ふだんはできないやりたいことを遠慮なくやればい  
いんですから。

深夜にこっそりと、いひひ。

それではどうしてそうなったのか、理由は五つあります。

一、眠ると必ず悪夢を見るので、悪夢を見ない時は、きまって呼吸が止まっている  
時なので、できるだけ眠らないようにしている。

二、人生もし百年生きても、天才的な能力がないから、やりたいことの半分もでき  
ないので、できるだけ眠らないようにしている。

三、好むと好まざるとにかかわらず、三百六十五日休み無しの仕事を何十年もやっ  
てきたので、休まない眠らない事が習慣になってしまっている。

四、死んだら永遠の眠りにつけるわけだから、生きている間に眠るというのは、余  
計な事だという考えが定着してしまっている。

五、眠っている姿が美しいのはこどもの時代だけで、おとなの眠る姿というのは、  
無防備で無頓着で無節操で無茶苦茶醜いという認識がある。

もしこの五項目に合致する人がいれば、「世界不眠クラブ」に参加しませんか。  
金ちゃんと共に、お待ちしております。

禿光山人 拝